

I T情報社会の進歩の中で (3)

他にも気づかないで進んでいるところがあります。その1つがICタグによる品物の管理です。ICタグをご存知でしょうか。タグというのは、品物や荷物につける荷札などのことですが、ICタグは、ICチップとアンテナで構成され、アンテナによって受けた電力によって、ICタグ1つ1つが固有のID番号を発信するようになっています。このIDは外部から書き換えることも可能で、いろいろなものに利用されてきています。以前は、電気店のパソコンソフト売り場の商品にシール上のものが取り付けられ、会計処理をしないと出口で警報が鳴ったり、大学の図書館で貸し出し、返却の処理をしないでゲートを通過するだけで処理ができてしまうというものがありませんでした。しかし、このように一部の場所を限定したものであれば問題にはならないのですが・・・。

このごろのICタグはどうなっているのでしょうか。ICタグは、アンテナを含めて非常に小さくなっています。ごく普通の値段表などにつけられていても気がつきません。まして、ICタグで情報が集められているということも気がつかなくなっています。便利な面はいろいろあります。倉庫の商品管理するばあいも搬入、搬出口にゲートをつけておけば、内蔵されたアンテナでいつ作られたどの商品がいくつ入ってきたか、出て行ったかを瞬時に管理することもできます。これまでのようにバーコードを読み取ったり、データを入力したりする必要がありません。図書館では、これまで1週間休館にして実施していた棚卸作業も、書棚のところでアンテナをスキャンすれば何があるか、順番はどうであるかがわかるので、短期間で完了することができます。これまでバーコードで便利になっていたものが格段に便利になります。ゲート方のリーダーライタがあれば、どこかを通過するだけで通過したもののIDがすべて読み取ることもできます。応用した定期であれば、持っているだけで改札を通過することもでき、クレジットと連動すれば、スーパーマーケットでレジをなくしたり（商品のIDを読み取れば何が買われたかわかり、クレジットカードから自動引き落としされる）することができるようになります。ちょうど、ETCで高速道路を利用するようなものです。そうすると、個人の購入の嗜好がわかり、スーパーであれば品揃えを検討するバックデータとしたり、生産メーカーとしては、生産計画を立てる情報にすることができます。消費者としても、野菜などの新鮮な食料品に、生産段階でICタグがついてあれば、どこの誰がいつ作って、どんな経路で流通してきたかの情報を受け取ることも可能になります。

なかなかいいことばかりだと思われがちですが、はたしてそうでしょうか。物を売る方の論理としては、消費者のニーズを知りたいわけですから。購入した人のデータとリンクができれば、どこで、どの年代の人がいつ購入したという情報になりますから、それに合わせて商品の供給を行えばよいわけですから。在庫も最小にできるでしょうし、再使用の投資で最大の利益を得ることができるわけですから。消費する側としては、自分の嗜好にあわせた情報が供給されること（東京のある私鉄が行っているサービスで、関連のデパートでの購入情報に合わせて、定期で電車に乗ったことを検知して携帯のメールに嗜好にあわせた電子メールを送るといったものがありました）もあるわけですから、いいなと思われるかもしれませんが、ここで住民基本台帳の番号が国民一人一人を識別できることと組み合わせるとどうなるでしょうか。管理という言葉がここで出てくるとどうなるのでしょうか。

(次回へ続く)

(今週の情報誌から)

○日経パソコン 9月13日号

特集 電池切れ5つの落とし穴

→ノートパソコンを外でバッテリーで使おうと思うほど持たなかつたりする。電源アダプタをつなぎっぱなしでも3年もたてばバッテリーもないのも同じ。実際使うのなら使い方で駆動時間は違ってくるのはあたりまえ。最も聞くのは液晶の輝度。半分の輝度で20～30分駆動時間が延びる。USBやPCカードは使わないほうが、もちろんモータの回るCD-ROMなどは使わないほうがいい。しばらく使わないならスタンバイより休止状態にするなど。Windowsの設定でもだいぶ違う。

特集 緊急！個人情報漏洩対策

→すぐに始められる個人情報漏洩対策。PCなどを捨てるなら、HDDを専用ソフトで完全にデータを抹消するか、CD-ROMなどのように物理的に破壊が必要。持ち運ぶならデータは暗号化して保護、盗難にはワイヤーロック、メールソフトにもいろいろ対策ができる。